

毘沙門天

森岡 正作

初風の

立 冬 の 朝 一 番 に 酒 届 く
田 や 畑 に 煙 いく 筋 獵 期 来 る
毘 沙 門 天 く わ つ と 大 綿 放 ち け り
海 鼠 に も 底 意 地 の あ り 黙 尽 く す
代 休 の 小 春 日 和 を 使 ひ 切 る
狐 火 の ひ と つ 流 れ て 一 つ 消 ゆ
太 釘 の 曲 が り 伸 し る て 日 短 か

登四郎先生の句集『羽化』に、へ初風の中を出てゆく船羨し」という句が載っている。晩年の作と思うと、「船羨し」にはまだまだ俳句の沖を目指したいのだという先生の思いが感じられる。

私の「出航」という句集の名は、今から三十年ほど前であろうか、沖の新年俳句会において「初風の切つ先となり出航す」が、先生の特選を戴いたことに由来する。出版の際には、先生がこの句を覚えておられて、「出航」にしなさいと命名して下さい。これから前へ進まねばならないと思っていた身には、誠に良い名を戴いたものである。

その後、小結社「出航」を許され、大結社「沖」の中にあつて、心の通い合うクルーに恵まれながら精進してきたつもりであるが、はたしてうまく前へ進んでいるのであろうか。今、先生の御句を前にして、自分の句を重ね合わせながら深く考えさせられるのである。